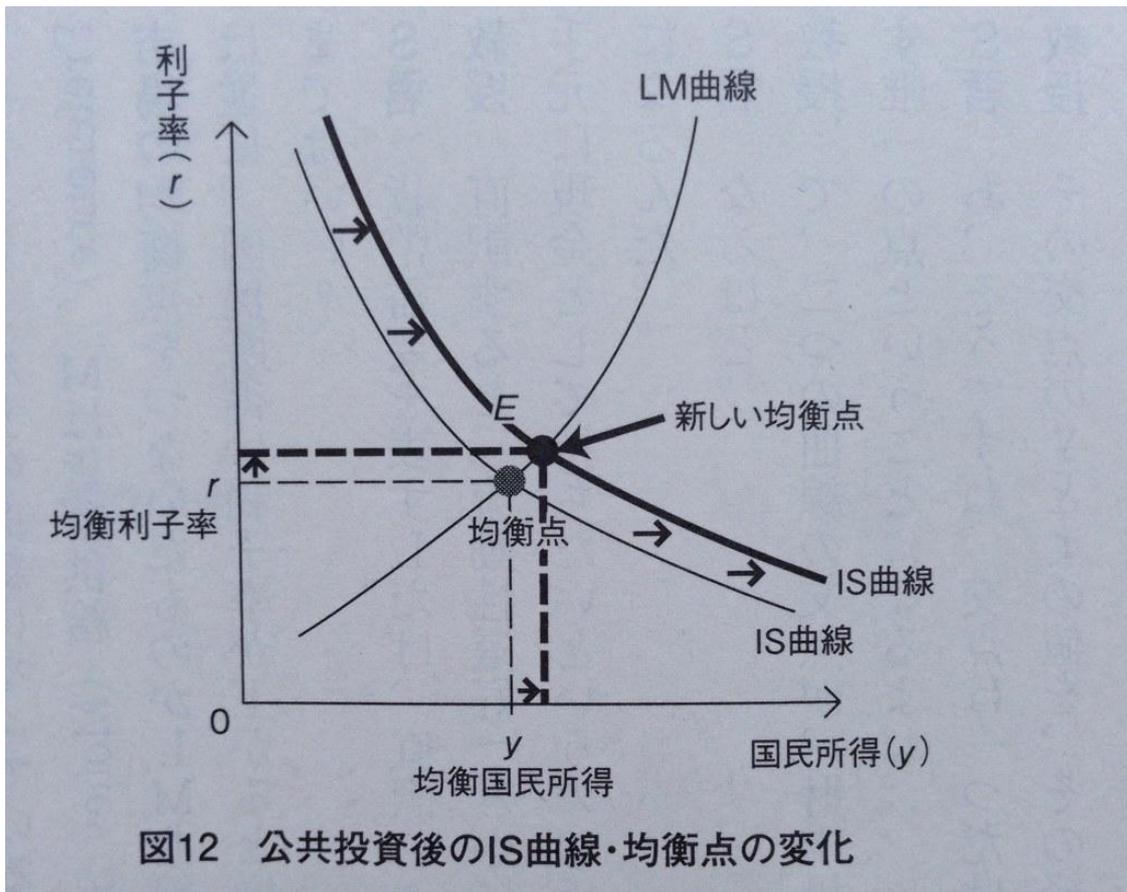


図11 IS曲線とLM曲線

縦軸に利子率(r)、横軸に国民所得(y)をとったグラフ。IS曲線もLM曲線も、 r と y の関数ということ。で右下がりの曲線になっているのがIS曲線。Iは投資(investment) Sは貯蓄(saving)。 $I=S$ となる財市場の均衡点をつないだものがIS曲線。IS曲線では、国民所得は利子率が下がると増え、上がると減る。一方、右上がりの曲線担っているのがLM曲線。Lは貨幣需要(liquidity preference)、Mは貨幣供給(money supply)を指していて、 $L=M$ となる貨幣市場の均衡点をつないだものがLM曲線。LM曲線では、IS曲線とは逆に、国民所得は利子率が上がると増え、下がると減る。



IS曲線も、LM曲線も、政府が財政政策や金融政策を行うと移動する。たとえば、政府が公共投資をすると、IS曲線は、ちょっと右にずれる。すると、二曲線の好転が右上にずれる。つまり、均衡国民所得も均衡利子率もちょっとずつ上がることになる。だから、公共投資をするとき、その結果がどうなるか、このIS-LMモデルを使って推計する。

総需要と総供給分析でいまのデフレを読み解く

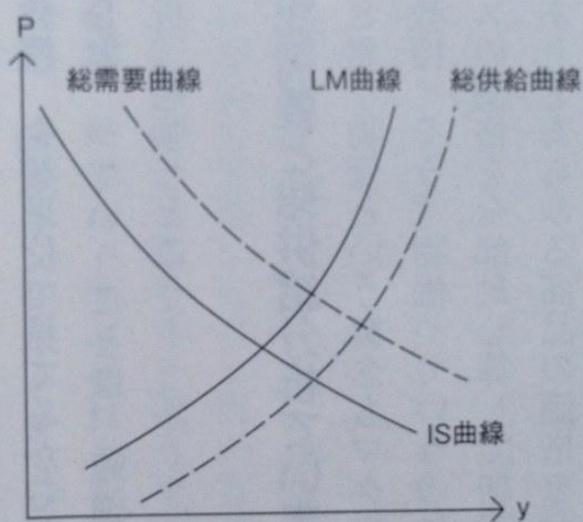
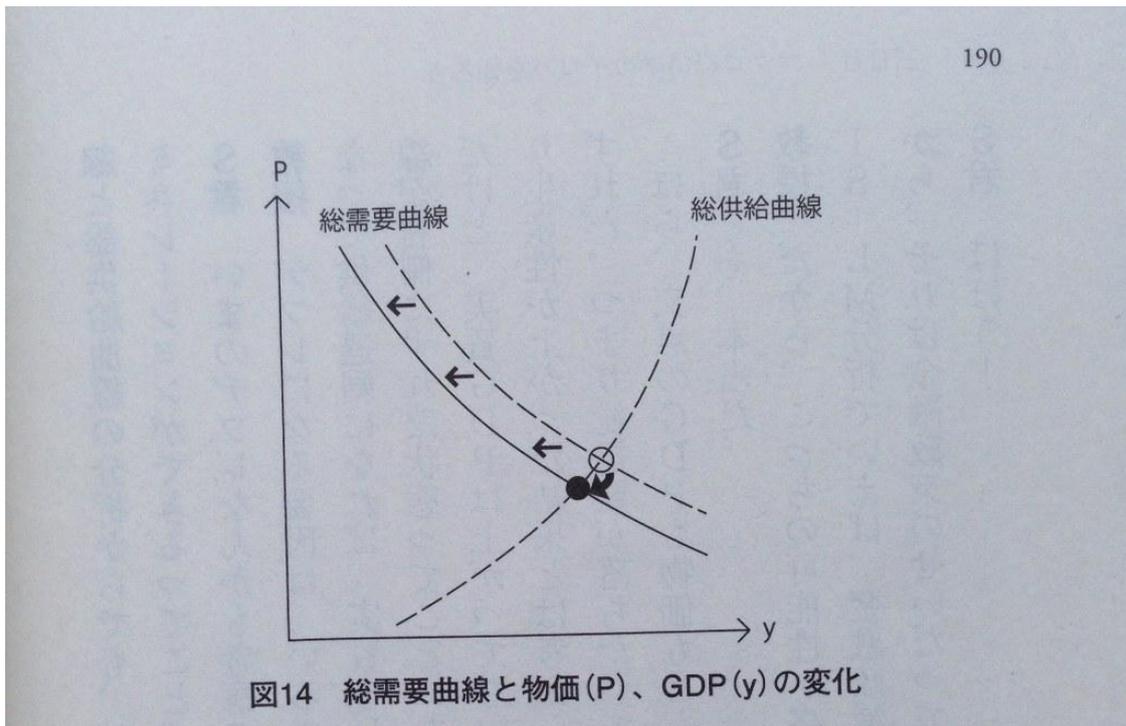


図13 物価(P)とGDP(y)の関係

物価という概念もマクロ経済特有の概念。総需要曲線、総供給曲線。

このグラフでも公共投資をすると、総需要曲線が右側に動いて、物価がちょっと上がって、GDPがちょっと増える。だから、公共投資をすると、どれくらい物価が上昇し、GDPが増すかがある程度分かる。だから、総需要曲線と総供給曲線の分析からも、いろいろな政策をうったときどうなるかシミュレーションできる。



デフレの考察

デフレの要因はいろいろあるが、たとえば、生産性がすごく高くなって供給過剰になれば、実質GDPが増えて物価が下がる。これは、総供給曲線が右側にずれた状態。でも、いまの状況では、物価はさがるのだけれど、実質GDPは上がっていない。だから、総供給変化があった、つまり生産性が上がった結果とは考えられない。考えられるのは総需要曲線が左にずれた。つまり総需要が落ちたってということ。だから需要が下がっているというのは、IS-LM分析でいへば、金融政策のせいだということがこういう分析からわかる。

マクロ経済を表現する様々な変数と関係式

マネタリーベース(MB)、国債金利(r)、物価(P)、為替レート(e)、さらに設備投資(IP) 鉱工業生産指数は製造業全体の動きを表し、これにサービス業の生産量を加えれば、ほぼGDPと動きが一緒になる。それから、消費(C)など。最初に金利が動いたり為替が動いたりすると、それとともに物価も動いたりして、それが設備投資や鉱工業生産、消費に影響を与える。で、鉱工業生産が変わると景気変動し、物価や金利も動くことになる。最初に政策によって決められる変数はBと r 、これを政策変数という。金融政策によって変えられるということ。MBと r は片方をきめれば必然的に片方が決まる関係。

MBの需要曲線、供給曲線を示したグラフですが、需要曲線が右下がり、これは、金利が高くなると現金を持たなくて金融商品に移るから、市場に現金が出回らなくなる。で、金利がずっと低くなると、もう金融商品をあきらめた結果現金が市場に出回るようになっていくことを示している。一方、供給曲線の方は、金融政策によって、あるところで供給量が一定に決まるから、垂直の直線になる。ただし、必ずしもMBによって r が決定されるわけではなく、それによってMBが決定される関係にもあるわけである。それで、MBか r が決まって、お互いを決めると、それが次々と他の変数に影響を与え、変化した他の変数が、さらにお互いに影響を与えていく。

